TAD Letter 29

富山県美術館
アート＆デザイン

没後20年 東野芳明と戦後美術　開会レポート

2025年1月25日（土）- 4月6日（日）

1月24日（金）、開会式と内覧会を行いました。開会式には、本展でアドバイザーを務めていただいた美術家の海老塚耕一氏、そして東野芳明氏のご家族にもご参加をいただき、沢山の招待者が見守る中、テープカットが執り行われました。内覧会では、海老塚氏と担当学芸員によるギャラリー・トークも行われ、海老塚氏から東野氏にまつわる興味深いエピソードが披露されました。
そして、展覧会初日の1月25日（土）には、海老塚氏によるトークイベント「東野さんとの日々」を開催しました。イベントでは、会場風景を投影しながら、東野氏の評論家としての歩みについてお話いただいた後、マルセル・デュシャンの通称「大ガラス」（東京ヴァージョン）の制作や、高輪美術館で開催されたデュシャン展にまつわるエピソードの他、海老塚氏が東野氏と共に企画をした1982年の展覧会「NOVEMBER　STEPS　今日の作家展」の開催経緯、また、サンパウロ・ビエンナーレなどの国際展での出来事など、多岐にわたるトピックについて、たっぷりとお話を伺うことが出来ました。会場には、前日の開会式から引き続きご参加いただいた方も多く、盛況のうちにイベントは終了しました。

開催概要

開館時間　9:30-18:00（入館は17:30まで）
休 館 日　毎週水曜日、2月25日（火）
会　　場　富山県美術館2階　展示室2、3、4
主　　催　富山県美術館、富山新聞社、北國新聞社、富山テレビ放送
観 覧 料　一般1100円（850円）、大学生550円（420円）、高校生以下無料 ※（）内は団体料金。
展覧会アドバイザー　海老塚耕一

見どころと出品作品

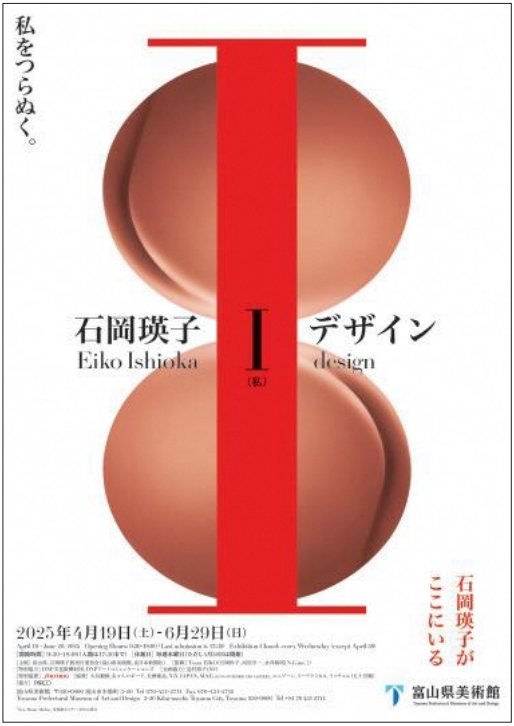
（左上）サム・フランシス作品と初渡欧時の資料　（右上）マルセル・デュシャン関連作品を集めた展示室3
（左下）東野氏が女性の芸術家について記した文献が並ぶ　（右下）富山県立近代美術館と東野氏の関わりを作品を通して紹介

展覧会図録のご案内

ミュージアムショップにて展覧会図録を販売中です。図録には、展覧会で展示している一部の作品･資料を掲載する他、東野氏が執筆した文献や、研究者による論考を収録しています。また、本展に向けて作成した東野氏執筆文献目録や年譜も収録し、東野氏の美術評論家としての歩みを辿ることが出来る資料性の高い図録になっています。展覧会ご鑑賞の記念にお買い求めいただければ幸いです。当館にお越しいただけない方には、ミュージアムショップにて通信販売も承っていますので、お問い合わせください。

編集・発行：富山県美術館
執筆：遠藤亮平（富山県美術館）、野田吉郎、
　　伊村靖子、平芳幸浩、光田ゆり
価格：2750 円（税込み）

石岡瑛子 I デザイン
Eiko Ishioka I Design



ポスタービジュアル　Design：永井裕明

石岡瑛子（1938-2012）は、広告、舞台、映画など、ジャンルを超えて世界的に活躍したデザイナーです。1961年、デザイナーとして資生堂に就職した石岡は、前田美波里をモデルに起用した広告ポスター「太陽に愛されよう」（1966年）で、従来の大和撫子的美人像を覆す健康的で強い意志を感じさせる新しい美人像を提案し、世間に衝撃を与えました。70年に独立すると、パルコや角川書店の仕事をはじめ、次々と既成概念にとらわれないセンセーショナルな広告キャンペーンを生み出していきます。80年代以降はニューヨークに拠点を移し、名だたる表現者たちと協働、活動の幅を広げました。衣装デザインを手がけた映画「ドラキュラ」（1992年）は、アカデミー賞（コスチュームデザイン部門）を受賞しています。

本展では、石岡の原点ともいえる初期の東京時代の仕事を中心に、ポスターやCM、レコードジャケットや書籍のデザイン、スケッチなど、約500点を一挙公開します。

21世紀、デジタル化の進行に伴い、社会は大きな変化の波にさらされています。アートやデザインの世界も例外ではありません。デジタル化されていない時代に表現者としての基礎を築き、その価値を問い続け、挑戦し続けた石岡瑛子。「I（私）」をつらぬき、表現の道をまっすぐ歩こうとした彼女の熱い血潮は、今もそのデザインの中に息づいています。

開催概要

会　　期　2025年4月19日（土）-6月29日（日）
休 館 日　水曜日（4/30は臨時開館 ※予定）
会　　場　富山県美術館2階　展示室2、3、4
主　　催　富山県、石岡瑛子展実行委員会（富山県美術館、北日本新聞社）
監　　修　Team EIKO（石岡怜子、河尻亨一、永井裕明［N.G.inc.］）
特別協力　DNP文化振興財団、DNPアートコミュニケーションズ
企画協力　迫村裕子（S2）
特別協賛　SHISEIDO
協　　賛　大谷製鉄、Kコスメ・ボーテ、五洲薬品、NiX JAPAN、MAE（2025年4月に前田薬品工業から社名変更）、ユニゾーン、リードケミカル、リッチェル（五十音順）
協　　力　PARCO
観 覧 料　一般1,500円（1,300円）、大学生1,000円（800円）、高校生以下無料、一般前売り1,300円
※（　）内は20名以上の団体料金

イベント

オープニングトーク
「石岡瑛子のIをめぐって ―再発見したいグラフィックの力―」
河尻亨一氏（編集者・執筆者／本展監修者）、
永井裕明氏（アートディレクター／本展監修者）
日時：2025年4月19日（土）14:00～15:30
会場：富山県美術館　3階ホール
定員：80名
申込不要・参加無料・先着順

上映会
「白雪姫と鏡の女王」
石岡瑛子が衣装デザインを手がけた「白雪姫と鏡の女王」（2012年、ターセム・シン監督）を上映します。
日時：2025年5月24日（土）14:00～（106分）
会場：富山県美術館　3階ホール
定員：80名
申込不要・参加無料・先着順

見どころと出品作品

左から時計回り順に：「太陽に愛されよう　資生堂ビューティケイク」資生堂ポスター（1966）　「あゝ原点。」PARCOポスター（1977）　「女性よ、テレビを消しなさい　女性よ、週刊誌を閉じなさい」角川書店ポスター（1975）　「ドラキュラ」映画ポスター（1992）　石岡瑛子©Kazumi Kurigami 1983　Miles Davis「TUTU」レコードジャケット（1986）

POINT

時代を牽引した名作の数々

貼るやいなや次々と盗まれたことでも知られるポスター「太陽に愛されよう　資生堂ビューティーケイク」をはじめ、PARCOや角川文庫の広告など、当時、誰もが街で目にした石岡瑛子の時代を牽引した代表作が集結します。

校正が示すデザイナーの執念

石岡瑛子のスケッチやメモ、校正紙（試し印刷したもの）を見ると、彼女の意図や制作プロセスがうかがえます。とりわけ、校正紙にびっしりと手書きされた朱字（あかじ）の修正指示からは、妥協せず、一心に自分の理想とするイメージを追求した石岡の情熱が感じられます。

才能あふれる表現者たちとの協働（コラボレーション）

芸術家レニ・リーフェンシュタール、トランペット奏者マイルス・デイヴィス、映画監督フランシス・フォード・コッポラ、etc.――様々な分野の、一流と呼ばれる表現者たちとコラボレーションした石岡瑛子。彼らと真摯に向き合い、お互いに触発し合って、親密な人間関係を築き上げました。石岡と彼らの残した刺激的な仕事の数々をご堪能ください。

「第14回世界ポスタートリエンナーレトヤマ2024（IPT2024）」会期終了しました

IPT2024は12月15日にて閉幕いたしました。会期中はトークイベントなどを通して、多くの皆様に世界から富山に集まったポスターを楽しんでいただきました。会期は終了しましたが、IPT2024の会場は当館YouTubeで引き続き御覧いただけます。

トークイベント「ポスターのことを話そう」

11月4日（月・祝）14:00～15:30
講師：上西祐理（グラフィックデザイナー）、室賀清徳（編集者）

会期中のトークイベントでは、IPT2024第一次審査員から上西祐理さん、室賀清徳さんをお招きして、IPTやポスターの魅力を語っていただきました。審査でのエピソード、お二人それぞれが気になった入選作のこと、そして、室賀さんが聞き手となり、上西さんの最近の仕事についての話題も。IPT2015で銀賞受賞の上西さんが「グラフィックの公募展の中でも、入選作が美術館のコレクションになるIPTは特別」と語ってくださったのが印象的でした。

最終日の追加ギャラリートーク

IPT2024で開催したギャラリートークのなかでも、最終日12月15日、追加開催のギャラリートークでは、富山県内在住の入選者の方々にも参加いただきながら、ご来場の皆様と会場を巡りました。地元富山のデザイナーの方々のIPTへの想いが格別な、「富山デー」となりました。

まるごとTADこども美術館

まるごとらべるつあ～！　ポスタートリエンナーレ編

12月14日（土）14:00～14:30

「まるごとらべるつあ～！」は、10月12日より開催していた「まるごとTADこども美術館」のイベントの1つとして企画した、美術館を巡る鑑賞プログラムです。テーマの違う3回のプログラムのうちの1回が、同時期開催の企画展「第14回世界ポスタートリエンナーレトヤマ2024」を巡る「ポスタートリエンナーレ編」でした。子どもから大人まで、自由に参加していただける企画で、内容によって「はじめて」コースと「しっかり」コースに分かれて学芸員が見どころを紹介しながら展示室内を巡りました。壁一面にずらりと並ぶポスターに圧倒されつつも、気になるポスターをじっくり見たり、何を伝えようとしているのかを話し合ったりし、ポスターの楽しみ方を体験する時間となりました。

2024（R6）年度 アーティスト@TAD

「土屋仁応ー静けさの向こうに」

《鹿》（部分）2020年 樟、水晶・彩色

2024年度のアーティスト@TADは、アーティスト・土屋仁応（つちやよしまさ）氏を招き、展覧会「土屋仁応ー静けさの向こうに」を行います。土屋氏は、1977年神奈川県横須賀市出身。東京藝術大学で彫刻を専攻、2007年東京藝術大学大学院文化財保存学彫刻博士課程修了。2018年円空大賞（円空賞）受賞した、現在活躍中の木彫家です。神話などに登場する神秘的な生き物たちをテーマに、樟（クスノキ）を用いた作品を制作しています。作品の表面は白をベースとした淡い色彩が施されており、生命の持つ無垢な印象を見る者に与えます。
2024年の富山滞在を契機に制作を始めた新作を含めてご紹介する本展は、富山の地で土屋作品を初めて紹介する機会となります。

富山滞在

2024年7月末（井波、五箇山、富山市内など）

ワークショップ

2025年1月18日、19日（実施済み）

公開展示作業

2025年3月末（予定）

展覧会

2025年4月3日～6月15日（予定）/1階TADギャラリー

アトリエからのお知らせ

オープンラボ

「でこぼここすり絵・フロッタージュ」

同時期開催の企画展『没後20年 東野芳明と戦後美術』にちなみ、シュルレアリスムで用いられる技法であるフロッタージュで作品を作ります。
素材（クリップや輪ゴムなど）を選び、紙を置き、色えんぴつやクレヨンで紙を擦り模様を浮かびあがらせます。偶然の産物から想像力と閃きを用いて作品を制作する楽しさを体験しましょう。

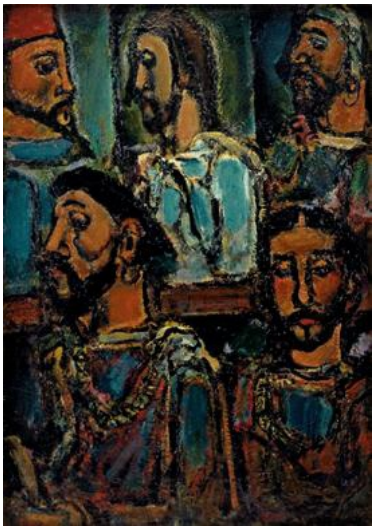
開催概要

開催期間　2025年1月30日（木）～4月8日（火）
活動時間　10:00～12:00/14:00～16:00 ※入場は終了30分前まで
会　　場　3階アトリエ（ラボ）
定　　員　24名 ※1テーブルにつき4名
対　　象　こども～大人までどなたでも

参加無料、事前申込不要、時間内随時受付
※都合により、お休みする場合があります。あらかじめご了承ください。

《パシオン》ジョルジュ・ルオー

1943年、キャンヴァス・油絵具　104.0×73.5cm



作者のジョルジュ・ルオー（1871-1958）は、太く力強い輪郭線と、塗り重ねられた絵の具の重層的な質感を伝える表面のきめ、明るく輝くような色使いがその作品の特徴として知られる。敬虔なカトリック教徒で、画業の初期より晩年に至るまでキリスト教主題の制作に熱心に取り組んでおり、「20世紀最大の宗教画家」とも言われている。

キリスト教神学において、本作のタイトルである「受難 passion」とはイエス・キリストが捕縛（ほばく）されてから処刑されるまでのできごとと、その過程で受けた精神的・肉体的苦しみを指し、新約聖書の四福音書のうち、これらのできごとを記した部分は特に「受難物語」と呼ばれる。捕らえられたキリストがユダヤ総督ピラトの前に引き出される裁判の場面が本作の主題であり、前列には鎧をまとった兵士が、後列には左右を男たちに囲まれ静かに目を閉じてたたずむキリストが描写されている。姿に見えないピラトはおそらく画面の外、鑑賞者と同じ位置におり、私たちはピラトと同じ視点からキリストを見ることとなる。

1907年頃、ルオーは友人の検事に連れられてセーヌ県裁判所に頻繁に出入りし、裁判を傍聴している。この経験をきっかけに、特に1907年から1914年にかけて裁判所を主題とした作品が数多く描かれており、以降数は少なくなるものの同主題の作品が継続して制作された。この時期の裁判を描いた作品のなかに、本作に類似する構図の作品が認められることから、本作は「受難物語」のうち、裁判所の場面を描いたことが推察されている。

ルオーはキリストを描く時、聖顔布[1]のように顔を大きくあらわしたり、真正面からとらえることが多かった。横顔を描く際は、「ミセレーレ」の《彼は虐げられ苦しめられ、しかも口を開かざりき》のように、茨の冠を頂き目を閉じてうつむく、辱められた姿である。本作に登場するのは刑を受ける前のキリストであるが、鞭打たれた受難のキリスト同様に静かに目を閉じる横顔は、これからその身に起こる苦痛を想起させる。

《パシオン》にはルオーがこれまで制作した作品に通じる要素が各所に見られる。長らく宗教主題に取り組み続けた、その積み重ねを想像させる作品である。

普及課学芸員 竹花 藍子

参考文献:
・『ジョルジュ・ルオー聖なる芸術とモデルニテ』パナソニック汐留ミュージアム・北九州市立美術館・NHKプロモーション、2018年
・『出光コレクションによるルオー展』東京都現代美術館・岩手県立美術館・NHK プロモーション、2005年
・『ルオーのミセレーレ』北九州市立美術館、1980年
・Fondation Georges Rouault-https://rouault.org/en/（2024年12月6日最終閲覧）

（1）：キリストの顔がうつった布のこと。キリストが十字架を背負ってゴルゴダの丘へ向かう途中、聖女ヴェロニカがヴェールで顔をぬぐったところ、その顔がヴェールにうつったという逸話がある。

富山県美術館（TAD）
〒930-0806 富山県富山市木場町3-20（富岩運河環水公園内）　tel.076-431-2711　fax.076-431-2712　https://tad-toyama.jp/